

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

第十二卷

84095

國立第一師範學校
(總務處)

分類號	320.8	號
社會科學門		
法律法學部		
總記叢書項		
次		
冊	18	12
分類號	320.8	號

T1A1

23

Ka:1ba



孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

明治九年
一月刻成

何氏藏版

萬法精理卷之二十三目次

人口ノ増減ニ關涉スル原理ヲ論ス

第一回 人獸増殖ノ論

第二回 婚姻ノ事ヲ論ス

第三回 子女ノ分限ヲ論ス

第四回 家族ヲ論ス

第五回 正室ノ妻ニ等級アルヲ論ス

第六回 政體相異ナルニ應シテ庶出ノ子ヲ處分
スルニ不同アルヲ論ス

第七回 父ニテ婚姻ヲ許諾スルヲ論ス

第八回 同上

第九回 少女ヲ論ス

第十回 男女婚姻ノ道ヲ決定スル所ノ事情ヲ論
ス

第十一回 暴政ヲ論ス

第十二回 諸國男女ノ口數ヲ論ス

第十三回 港津ヲ論ス

第十四回 土地ノ產物ニ因テ人數ヲ要スルノ多

寡相同ジカラザルヲ論ス

第十五回 工藝ト人民トノ關涉ヲ論ス

第十六回 制法者ハ須ラク人種ノ繁殖ニ注意ス

ハキ事

第十七回 希臘及ヒ其住民ノ口數ヲ論ス

第十八回 羅馬人ノ未タ起ラサル際ノ形勢ト人
口ヲ論ス

第十九回 地球人烟ノ減耗ヲ論ス

第二十回 羅馬人ハ人類ノ繁殖ヲ勸奨スハキ法
律ヲ制定セザルヲ得ザルノ地位ニ在
リシ事

第二十一回 羅馬法律ノ人類ノ繁殖ニ關涉スル

ヲ論ス

第二十二回 棄兒ノ事ヲ論ス

第二十三回 羅馬滅亡ノ後ニ於ケル宇内ノ形勢

ヲ論ス

第二十四回 歐洲ノ人口變更セル所以ヲ論ス

第二十五回 前田ノ續キ

第二十六回 將來ノ效果

第二十七回 佛國ニ於テ人類ヲ繁殖セシメンガ

為メニ制定シタル法律ヲ論ス

第二十八回 何等ノ方法ヲ以テ人烟ノ減耗ヲ遏

止スヘキヤ

第二十九回 施濟院ノ事ヲ論ス

萬法精理卷之二十三目次終

萬法精理卷之廿三

何禮之譯

人口ノ増減ニ關涉スル原理ヲ論ス

第一回 人獸増殖ノ論

雌禽牝獸ハ生育ノ力極メテ壯ニシテ同類速カニ蕃衍
スト雖凡人類ニ至テハ然ラス各人ノ思想相同レカラ
ス性質情欲ニ濃淡ノ別アリ或ハ名譽ヲ尚ヒ或ハ僻偏
スル所アリ或ハ容色ヲ毀損センコトヲ憂ヒ或ハ分婉ノ
苦痛ヲ恐レ或ハ衆多ノ子女ヲ養育スルノ勞苦ヲ慮ル
等ノ緣由アルニ因テ其生々ノ勢ヲ抑妨スルモノ枚舉

ニ暇アラス

第二回 婚姻ノ事ヲ論ス

子女ヲ養育スヘキ性法上ノ義務ハ父タル者ノ負荷スル所タルヨリ婚姻ノ禮自ラ定マリ婚姻ノ禮アルニ因テ世人愈ナ此義務ノ必行ス可キヲ識得スボムボニユスマラーノ書中ニ記スル人民ノ如キハ男女婚姻ノ禮ヲ行ハサルヨリ唯タ其容貌ノ相肖似スルヲ取ルノ外更ニ父子ノ天倫ヲ辨知スルノ法無レト云フ
開化國民ニ在テハ婚姻ノ大禮ヲ行フニ依テ此義務ヲ必行スヘキモノト制定セリ是レ法律ノ見点ヨリ之ヲ

視ルニ此人ヲ措テ更ニ至當ノ人ヲ得可ラサレハナリ
飛走ノ賤族ニ於テハ此義務ヲ將テ一般ニ雌牝ノ擔任ス可キ職分ニ歸スト雖ヒ人類ニ在テハ其ノ生育スル所ノ子女皆ナ事物ノ是非ヲ判別スルノ心ヲ具有セサルニ非サレハ生長ノ勢極メテ遲緩ニシテ數多ノ歲月ヲ閱セサレハ發達セス又子女既ニ生活ノ計ヲ得ルト雖ヒ自ラ其一身ヲ治ムルヲ能ハサレハ之ヲ鞠養スルノミニ止ラス必ス亦之ヲ教導ヲ怠ル可ラス隨テ父タル者ノ義務ハ區域自カラ廣大ナラサルヲ得サルナリ故ニ野合私通ハ殆ト人族繁殖ノ功效無キモノナリ何

トナレハ婚媾其禮ニ違フハ則チ其ノ子女ヲ養育教導スベキ天賦ノ義務ヲ負荷セル父ノ果シテ何人タルヲ定メ難ク而シテ此義務ニ當ル可キ母ハ廣恥ノ心後悔ノ情或ハ弱質微力ニシテ一身ノ自由ヲモ全享スルヲ能ハス或ハ法律ノ嚴厲ナル等百般ノ障礙ニ遭フ而已ナラス衣食ノ需要ヲモ充足シ能ハサルモノ多キニ居レハナリ

賣淫無恥ノ徒即チ娼妓ノ如キハ決シテ子女教養ノ道ヲ得ルモノニアラス是レ教養ノ劬勞煩難ハ已レカ墜落セル境界ト兩立ス可キニアラス且其身心俱ニ頹壞

シテ法律ノ保護ヲ受用シ能ハザレバナリ

由是觀之人民其情慾ヲ節シ貞操ヲ重スルヲ以テ人族繁殖ノ道ニ缺ク可ラザル所以ヲ知ルニ足ラン

第三回 子女ノ分限ヲ論ス

男女婚姻ノ禮ヲ行フテ出生セル子女ハ必ス父ノ分限ニ從フ可ク若シ婚姻ヲ行ハザレハ唯タ母ノ分限ニ屬ス可キハ物理ノ自然ニ由ルモノナリ

又隸ヲ畜ノ國民テ其母ノ分限ニ從ハシムルモノニ於テ子女ヲシ居多ナルモ全ク此理ニ由レリ

第四回 家族ヲ論ス

妻タルモノ夫家ニ嫁シテソノ家族トナルハ天下普通

ノ習慣ナリ然ルニ臺灣ニ於テハ之ニ反レテ夫タル者、
妻家ニ入贅シテソノ家族トナリ更ニ弊害アルヲ見ス
ト云フ

斯ク同性リ 譬ハハ母ニリ女ニ女ニノ人ヲ以テ一家ヲ紹

續セシムル法律ハ大ニ人類ノ繁殖ヲ助長スルモノニ

シテ家族ハ恰モ一種ノ財産ノ如キ者ナレハ之ヲ連綿

トシテ保續シ能ハザル子男ヲ生育スル人ハ更ニ之ヲ

永續セシムハキモノ子女ヲ有セザレバ其心満足セザル

ナリ

夫レ姓名ハ人ニ一物ヲ得ルノ意思ヲ起シ之ヲ不朽ニ

保續シテ湮滅セサルノ想像ヲ與フルモノナリ故ニ姓
名ハ衆民ヲシテ各其家族ヲ悠遠ニ紹續シテ相斷エザ
ルノ情願ヲ發作セシムルニ極メテ適應セリ然ルニ天
下ノ廣キ人民ノ多キ或ハ姓名ヲ以テ家族ノ親疏ヲ區
別スルノ民アリ或ハ帝ニ形體ノ異同ヲ以テ彼我ノ別
ヲ定ムルニ過ギザルノ民アリ此ノ形體ヲ視テ彼我ノ
別ヲ定ムルノ人民ハ決シテ夫ノ一族ノ姓名ヲ冠スル
所ノ人民ニ齊シキ福利ヲ受用スルヲ能ハサルナリ

第五回 正室ノ妻ニ等級アルヲ論ス

法律宗教ノ二者ニ依テ數種ノ婚禮ヲ制定スルヲ往々

之アリ回教ヲ奉スル諸國民ハ概ノ數人ノ妻ヲ娶ルカ
故ニ各室ニ等級ヲ立テ其子女ノ如キ或ハ父家ニ出生
スルニ依リ或ハ民事上ノ婚禮ヲ行フニ依リ或ハ胎母
ノ分限自主ノ人ニ非サルニ依リ或ハ出生ノ後ニ父ニ
認許セラル、ニ依リ各其身分ニ區別ヲ生ス
既ニ父ニ於テ我カ子女ナリト認許セルモノヲ却テ法
律上ヨリ之ヲ賤視スルハ理ニ戾ルノ甚シキト謂ハザ
ルヲ得ス故ニ日本ニ於ルカ如キ特別ノ理由アルニア
ラザルヨリハ此等ノ子女ヲシテ父家ヲ相續セシムル
ヲ要ス蓋シ日本國ニ於テハ國君ノ賜ヘル妻ノ所出ヲ

除ク外絶テ父蔭ヲ承襲スル能ハザルノ制度ニシテ恰
モ昔時我カ歐土ニ行ハレタル封建ノ政體ト同シキヲ
以テ國君恩賜ノ封土ヲ成ルハク分割セシテ軍役ニ
服事セシメンカ爲メナリ

二等親ノ妻ヲシテ家族ノ尊敬ヲ享ケシムルヲ猶、我
カ歐土ノ一夫一婦ニ於ケルニ異ナラサル邦土アリ是
邦ニ於テハ二等親ノ妻即チ側室ノ子女ハ皆ナ一等親
ノ妻即チ正室ニ屬スル者ト認許スルモノナリ是レ即
チ支那ノ風俗ニシテ庶子ハ生母ノ爲メニ孝養ノ禮ヲ
竭サス三年ノ喪ヲ服セシテ唯タ嫡母ニ奉養スルノ

ミナリ、

此陰制アルニ由テ是等ノ人民ニハ絶テ歐土ニ所謂私
生ノ子女ヲ有セザルノ理由ナリ故ニ此陰制ノ行ハル
ル邦土ニ於テ若シ私生ノ子女ヲ正出ニ改メ得ヘキ法
律ヲ施行スルハ國民ソノ七八ハ此法制ノ為メニ恥
辱ヲ招クヲ免カレザルヲ以テ一概ニ之ヲ看テ苛虐ノ
政令ト做サンノミ又是邦ノ婦女ハ之ヲ深閨ニ幽閉シ
テ女奴閨人ノ外、出入ヲ許サバレハ踰牆鑽隙ノ醜行ヲ
犯ス一極難ク法律ニ於テモ亦斷ジテ此弊ナシト認
メリ萬一之アルハ母子ノ性命ヲ俟セテ一刀ノ下ニ

斬滅ス可キガ故ニ姦通ノ子女ヲ處分スルカ如キ法律
ヲ要セザルナリ

第六回 政體相異ナルニ應シテ度出ノ子ヲ處分
スルニ不同アルヲ論ス

是故ニ數妻ヲ娶ルヲ許容スル邦土ニ在テハ絶テ私
生ノ子アルヲ無シ之ヲ賤視シテ正出ノ子ト區別ヲ立
ルハ獨リ一夫一婦ノ國ニ於テノミ然リトス蓋シ一夫
一婦ノ法制ナレハ蓄妾ノ事ヲ以テ人生ノ醜行ト認メ
ザルヲ得ザルカ故ニ都テ私通野合ニ由テ所舉ノ子女
ヲ賤ミテ俱ニ齒セザルニ至ルモノナリ

共和政ハ純ラ道義ヲ淬勵シテ一点ノ汚斑ナキヲ要ス
ルヲ以テ其私生ノ子女ヲ賤惡スルヲハ立君政ニ於ル
ヨリモ一層嚴厲ナラザル可ラス

嘗テ羅馬ニ施行シタル蓄妾ノ禁令ハ頗ル嚴酷ニ失セ
ルカ如シト雖モソノ國初ノ憲法ニ據レハ苟モ國士ノ
地位ニ立モノハ必ス婚姻ノ大禮ヲ執行セザルヲ得ス
之ニ休婚離婚ノ事ヲ許容シテ法制ノ過嚴ヲ寬弛スル
ヲ以テ風俗頹壞ノ極ニ達スルニ非サルヨリハ決シテ
國士ノ心ヲ誘掖シテ蓄妾ノ醜行ニ陷ラシムルヲアラ
ザルノ理ナリ

國士タルノ資格ニ君權ヲ付與スル共和邦ニ在テハ國
民ノ品位極メテ重要ノモノナルカ故ニ如是政體ニ於
テハ往々私子ノ分限ニ就テ法律ヲ制定センヲ觀出
スベシ如是法制ハ全ク共和政ノ特質タル憲典ニ關涉
シテ施行スルモノニシテ敢テ婚姻ノ正否ノミニ因テ
然ルニ非ス故ニ民權微弱ニシテ執柄者ノ強威ニ敵ス
ルヲ能ハサル片ハ時トシテ私生ノ子ヲ國士ノ籍ニ編
入シテ以テ國士ノ勢焰ヲ増加セシマアリ又希臘人ハ
埃及王ヨリ贈遺スル禾穀ノ得分ノ多ランヲ欲シテ
私生ノ子ニ國士タルノ特准ヲ各ミテ付與セザルヲア

リ之ヲ要スルニアリストールノ論ニ人民未ダ繁殖
セザル府邑ニ於テハ私子ニ國士タルノ特准ヲ與ヘテ
父ノ財産ヲ兼襲セシメ、人烟増殖スルヲ待テ之ヲ許サ
スト謂ヘルヲ觀テ當時ノ政畧ヲ知ルニ足レリ

第七四 父ニテ婚姻ヲ許諾スルヲ論ス

父其子女ノ婚姻ヲ許諾スルハ父權即チ財産所有ノ權
ニ淵源セリ而シテ父ノ其子ヲ親愛スルノ情及ヒ子女ノ
未タ世事ニ通セス少艾ニ心醉シテ血氣定マラサルト
ニ由テ然ルモノナリ

共和政體ノ小國或ハ前文ニ論ゼシガ如キ特別ノ制度

ヲ設クル邦土ニ於テハ國士タル者ソノ子女ノ婚姻ヲ
監察スル權理即チ父タル者ノ天賦ノ權ヲ宰官ニ管掌
セシムヘキ法律ヲ制定スルヲ得ベシ是レ是等ノ政體
ニ在テ愛公忘私ノ至情ハ總テ自餘ノ諸愛ニ起出スル
ヲ得ヘキヲ以テナリブライトハ乃チ宰官ヲシテ婚姻
ノ規則ヲ整理セシメ羅基頓ニ於テハ宰官親ラ之ヲ擔
任シタリ

然レ氏普通ノ制度ニ於テハ父タル者ニ子女婚姻ノ處
分ヲ發任セリ是レ父タル者ノ其子女ノ為メニ謀慮ス
ル所ハ常ニ他人ヨリ優レリト思想スルヲ以テナリ夫

レ造化主ハ人ノ父タル者已ニ暮齡ニ傾キテ自ラ福祉ヲ享有スルノ情願相衰フニ到レハ轉タ之ニ賦スルニ其子女ノ為メニ繼嗣ヲ得ルノ情願ヲ以テシ其心ニ子々孫々能ク血脉ヲ不朽ニ傳ヘテ家門ノ繁昌スルヲ樂マシムルモノナリ然ルニ若シ政府ニ於テ父權ヲ褫奪スルガ如キ壓制ノ政ヲ行ハ、其結果ノ利害ハ問ハスシテ明カニシテ曾トーマスゲーシナルモリ西班牙人ガ西印度ニ施シタル暴虐ノ政ヲ記述セルト其趣ヲ同シクスルニ至ル可シ其言ニ曰、婚齡ニ達シタル子女ノ口數ニ從ヒテ父ノ貢稅ヲ増加シテ一日モ速ニ配偶ヲ求メシメ

而シテソノ子女ノ婚嫁スルヲ候テ忽チ亦貢稅ヲ課ス其法制專ラ稅歛ヲ増加センガ為ノニ十五歲以上ノ子女ニ婚嫁セシテ父家ニ就養スルヲ許サス加旃印度人ハ自餘ノ人民ニ比スレバ造化機早ク熟シ且ツ勞作ニ從事スベキ知識氣力亦早ク開發スルデ口實トシテ男子ハ十四歲、女子ハ十三歲ヲ以テ婚嫁ノ期ト定メ甚シキニ至ラハ若シ印度人ノ肢體強壯ナルヲ視レバ未ダ十二歲ノ童身ナルニ強テ婚姻ヲ行ハシメタリト其文ヲ結フニ臨テ氏ハ其類例ヲ舉テ之ヲ最モ慚愧スベキ事情ナリト評駁セリ由是觀之印度人ハ最モ自由

ヲ得ヘキ行為ニ於テ最モ甚シキ束縛ヲ受ル者ナリ

第八回 同上

英國ニ在テハ女子其父母ノ許諾ヲ俟タス一已ノ愛癖ニ從テ濫リニ婚姻ヲ約スルニ由リ往々法律ニ犯觸スルノ弊アリ予カ想像ニ據レハ蓋シ該國ノ法律ハ居院獨棲ノ制ヲ設立セザルカ故ニ女子タルモノハ婚姻ヲ結ノ外他ニ其心情ヲ排遣ス可キノ道ナキヨリ其ノ奔馳スルヲ拒キ能ハザルヲ以テ自ラ男女婚嫁ノ規則寛裕ニシテ之ヲ行フニ儀式最モ簡易ナル可シ之ニ反シテ佛國ニ於テハ女子ノ為ノ常ニ獨棲不嫁ノ法制ヲ

立ルガ故ニ父ノ許諾ヲ待テ然後婚姻ヲ結フヘキノ法令ヲ制定シテ能ク人情ニ適當スルノ得タリ然ルニ伊太利西班牙二國ノ如キハ已ニ尼刹ノ設立アリテ女子獨棲ノ路ヲ開クト雖モ父ノ許諾ヲ得スシテ婚姻スルヲ女子ニ許容スルハ事理ニ戾レルノ慣習ト謂ザルヲ得ス

第九回 少女ヲ論ス

夫レ少艾ノ能ク心身ノ自由ヲ得歡樂ヲ享クルハ童ニ婚姻ノ一事ニ頼リテ然ルノミ而レテ其性質タルヤ心思ヲ具有スト雖モ敢テ事物ヲ考察セス又之ニ感觸ス

ルヲ無ク眼アリテ敢テ物ヲ視ス、耳アリテ敢テ物ヲ聞
カス、朝夕瑣事ニ拮据シ訓誡ニ束縛サレテ痴愚ノ状態
アルヲ免レサル者ナレハ自ラ熱心シテ良縁ヲ求メ一
身ノ歸着ヲ謀ラサルハ無シ故ニ獎勵ノ法ヲ設ケテ以
テ婚姻ヲ催促スヘキハ少艾ニ在ラスシテ少年ノ男子
ニ在リ

第十回 何等ノ事情アリテ能ク男女婚姻ノ道ヲ
決定スルヤ

何處ヲ論セズ男女共ニ棲テ生計ヲ營ムノ便宜ヲ得レ
ハ則チ五ニ婚姻ノ約ヲ結フハ必然ノ情勢ナリ蓋シ人

類苟クモ生計ノ艱難ニ阻格セラレザルヨリハ其男女
相互ニ配偶ヲ求ムルハ全ク良能ノ傾向スル所ナレハ
ナリ

新タニ起ル人民ハ月ニ歳ニ増殖シテ止サルモノナリ
是レ草萊ヲ闢キテ新タニ一國ヲ成スノ人民ハ孤棲獨
住ノ不便利ヲ感覺スルヲ更ニ甚タレク而レテ幾多ノ
子女ヲ生育スルモ決シテ生計ノ不自由ヲ招カザルガ
故ナリ然レモ國土更ニ開化シテ一社會ヲ成スニ至テ
ハ其情況全ク之ト相反ス

第十一回 暴政ヲ論ス

乞丐ノ如キ原来一物ヲモ有セサル輩ハ却テ數多ノ子女ヲ生育スルモノナリ蓋シ此輩ハ新タニ起ル人民ノ境遇ニ在レハナリ其故何トナレハ乞丐ヲ業トスルモノハ父ハ其子女ニ生計ノ道ヲ授クルニ一物ヲモ費ス所ナキ而已ナラス呱々飢ニ啼クノ嬰孩ハ却テ父母ノ糊口ヲ助クルノ器械ト成レバナリ且此輩ハ其躬自ラ社會ノ負擔ト爲リテ他人ノ給養ヲ仰クモ決レテ社會ニ對シテ一負擔スル所ナキヲ以テ國土富饒ナルカ或ハ鬼神ニ執迷スル所ニ於テハ夥シク繁殖スルモノナリ然リト雖モ全ク暴政ノ下ニ其生ヲ繫クカ爲メニ貪

窮ノ苦域ニ陷リ其ノ僅カニ所有セル五畝ノ田ハ之ヲ衣食ノ源ト仰ク可ラサル而已ナラズ却テ聚斂拮据ノ愁因タルニ過キザルノ思想ヲ懷カカ如キ人民ニ至テハ躬ラ一身ノ生計ヲモ保ツル能ハス何ノ餘裕アリテ以テ之ヲ子女ニ分割スルヲ得ンヤ故ニ壯健ノ子弟一朝不幸ニシテ病床ニ委頓スル時ハ之ヲ療養供給スルヲ能ハズシテ手ヲ束子テ夭札ノ禍ニ罹ルヲ目撃スルハ外無カルヘシ此等ノ人民ハ決シテ其生齒ノ繁殖ヲ望ムベカラザルナリ

然ルニ曾テ事物ノ實驗ナク喋々空理ヲ辯論スルノ士

アリ説ヲ為シテ曰ク民窮スルヲ愈甚ケレバ家口ノ増殖モ亦愈多シト要スルニ稅歛益厚ケレハ其ノ之ヲ輸納シ得可キノ地位ニ到ランヲ欲シテ愈其職業ニ努力スバシトノ意ナリ之ヲ往事ニ徵スルニ國家ノ滅亡ヲ致セルハ常ニ是言ニ非サルハ無ク又之ヲ將來ニトスルモ政府ノ顛覆ヲ階スルハ亦此言ノ外ニアラザル可シ

暴政極マル處口終ニ人類天倫ノ至情ヲシテ自ラ滅却ニ歸セシムルモノアリ即チ西班牙ノ西印度ニ於ケルガ如キ是レナリ若シ西人ヲシテ稍殘忍ノ行ヲ歛メシ

メタランニハ西印度ノ婦女何ソ其子ヲ生産スルヲ忌嫌スルノ理アラシヤ

第十二回 諸國男女ノ口數ヲ論ス

我カ歐羅巴ニ於テ男女ノ生産ヲ比較スレハ男子多クシテ女子少ナキヲハ既ニ第十六卷第四回ニ論ゼシガ如シ然ルニ日本ハ之ニ反シテ女子ヲ舉ルモノ男子ヨリ多キニ居ルト云フニ依リ彼此ノ形情ヲ參觀スレハ日本ニ於テハ我カ歐羅巴ニ於ケルヨリモ更ニ多生質ノ婦女アリ從テ人口ノ繁殖ヲ致スモノモ亦多シト斷了スヘキノミ

聞クガ如クンババンタムノ地方ニ在テハ平均ノ口數
 十女ニ一男ヲ得ルト云フ夫レ二性ノ平均ヲ失スル斯
 ノ如キハ該地ノ家口ヲ將テ之ヲ他ノ風土相異ナル邦
 國ニ當ルモ尚ホ一口ト五口半ノ比例タルヲ免レスソ
 ノ男女ノ相等シカラザルヤ實ニ非常ナリト謂フ可レ
 然レ其家口ハ斯ク數多ナルモ之ヲ給養スルニ充分
 ノ産業アル者ハ極メテ寥々トシテ稀レニ視ル處ナル
 ベシ

第十三回 港津ヲ論ス

沿海ノ府邑ニ住メル人民ハ自ラ波浪不測ノ險ヲ冒サ

ハルヲ得ザルモノニシテ或ハ遠地ニ赴キテ生計ヲ營
 或ハ風濤ニ溺シテ死亡スル者鮮ナカラザルヨリ自
 然ニ男子ノ口數減シテ女子ノ口數多キモノナリ然レ
 其之ヲ内地ノ府邑ニ比スレバ更ニ子女生産ノ許多ナ
 ルヲ見ルハ何ゾヤ是レ全ク沿海ノ人民ハ生計ノ方便
 ヲ得ルヲ甚タ容易ナルニ淵源スルヲ疑ナシト雖其魚
 肉ノ脂質或ハ人類生殖ノ效力ヲ助クル所ノ胚素ヲ具
 フルニアラザルヲ得ンヤ是レ即チ多魚海中ニ國ヲ成
 ス所ノ日本及ヒ江河ニ富メル支那ノ如キ多ク魚肉ヲ
 以テ食餌ニ供スル人民ノ口數增多ナル一原因ナルベ

シ若レ此ノ臆測ヲシテ果シテ誤ナカラシメハ我カ寺院ノ規律ニ於テ僧徒ニ肉食ヲ禁ジテ唯タ魚類ノミヲ許スハ之ヲ立法ノ精神ニ悖戾セリト謂ハサルヲ得ズ

第十四回

土地ノ產物ニ因テ人數ヲ要スルノ多寡相同ジカラザルヲ論ス

牧畜ノ地ハ多人ヲ要セズシテ其業ヲ成就スルニ足ルカ故ニ土地ノ幅員ニ比スレバ人烟甚タ稀疏ナルモノナリ而シテ犁鋤ヲ施ス土地ノ如キハ自ラ許多ノ人數ヲ要スルヲ固ヨリ牧畜地ノ比ニアラス殊ニ葡萄園ニ至テハ更ニ一層ノ多數ヲ加ハザルヲ得ザルナリ

英國ニ於テハ牧畜地ノ加増セシガ為ノニ住民ノ數漸ク減少スルヲ口實トシテ往々人民ノ怨望ヲ醸生セリ

宗教沿革史略ニ教正ブルチツトノ言ヲ引テ曰ク地主タル者十中ノ八九ハ穀物ヲ獲ルノ利潤ヨリモ羊毛ヲ賣テ得ル所ノモノハ更ニ居多ナルニ依リ各其所有地ニ範圍ヲ設ケ之カ爲メニ佃戸ハ力作ノ道ヲ失レテ地ノ分割ヲ強請セレバ其器ニ訴ヘテ一揆ヲ起シ以テ土下シテ私有地ノ範圍然ルニ我カ佛國ニ在テハ葡萄園ヲ解除セシメタリ

衆目ハ視ル所ナリ

煤坑ニ富メル國ニ於テハ石炭ヲ以テ柴薪ノ用ニ代フベキカ故ニ森林ニ斧斤ヲ加ヘ之ヲ闢キテ墮畝ト成ス

モ敢テ燃料ニ乏シカラス之ヲ自餘ノ諸國ニ比スルニ
一層ノ利益アルモノトス

米ヲ産スル國ニ於テハ水ヲ田ニ灌クノ勞工甚ク大ニ
シテ許多ノ人數ヲ使役セザルヲ得ス而ノ其ノ一家ノ
眷屬ヲ養フベキ米田ハ自餘ノ諸穀ヲ耕種スル土地ヨ
リモ狹少ニシテ充足ス可ク之ヲ詳言スレバ牧畜ノ用
ニ供セザルノ土地ハ其收穫ヲ以テ直ニ之ヲ人ノ衣食
ニ供給スヘク殊ニ牧畜ノ國ニ於テハ牛馬ノ勞作ニ委
スベキ工程ヲ以テ之ヲ人ノ力ニ讓ルガ故ニ犁耜ヲ執テ
墾畝ニ從事セシムベキ工程甚ク夥シク從テ人民ノ為

メニ無限ノ活路ヲ開クモノナリ

第十五回 工藝ト人民トノ關涉ヲ論ス

土地均分ノ制アル國ハ工藝ノ道開進セスト雖氏各人
已カ土地ヲ耕レテ衣食ノ需要ヲ充タレ自他相共ニ一
國ノ地面ヨリ生産スル所ノ果實ヲ支消スルガ故ニ人
烟極メテ繁密ナルモノナリ往古二三ノ共和政ニ於テ
其の例アルヲ觀ルベシ

我カ歐土ノ現況ニ於テハ土地ノ分配大ニ平均ヲ失ス
ト雖氏土地所産ノ量甚ク豊カニシテ常ニ耕作人ノ消
費ニ供シテ尚ホ餘アリ故ニ若シ工藝ヲ放擲シテ誘掖

スルヲナク専ラ稼穡ノ一途ニ從事スルギハ決シテ人口繁殖ノ期ナカル可シ何トナレハ躬ラ犁耜ヲ執ルト人ヲ傭役シテ耕種セシムルトニ拘ラス秋収ノ量豊カニシテ家ニ餘積アル時ハ人心自ラ怠慢ニ安シテ來年ノ勞作ヲ勉メサルハ通情ノ然ル所ナレバ坐食ノ人ハ衣食ヲ購買セント欲スルモ之ヲ得ルニ由ナク終ニ土地ノ所產ヲ消費スル所無キニ苦シムニ到ル可ケレハナリ是故ニ土地ノ平均ヲ失シタル國ニ於テハ工匠ノ徒ヲシテ土地ノ所產ヲ消費セシメシガ爲メニ工藝技術ヲ振興スルヲ最モ緊要ナレハ須ラク許多ノ人ヲ誘

掖シテ耕種ノ業ニ黽勉シ以テ已カ生計ニ供シテ餘裕アラシムルヲ要ス此政圖ヲ達スルニハ人民ニ奢靡ノ物品ヲ希望スルノ情意ヲ起サシメザル可ラス此情意ヲ満足スルハ獨リ工匠ノ徒ニ之レ依頼セザルヲ得ズ減工省力ノ器械ハ始終有益ノモノト謂フ可ラズ若シ夫レ一個ノ製作物アリ品良ニ價廉ニシテ齊シク製作人及ヒ買客ノ兩便ニ歸スルニ方テ更ニ一層ノ勞作ヲ省略スベキ器械(即チ工人ノ數ヲ減ス可キ器械)ヲ創用スルハ却テ有害ノモノタルヲ免レサル可シ譬ヘハ今日ノ氣運驟カニ進ミテ到ル處ニ水車機ヲ設立スルノ

便利ヲ得ハ數多ノ工人其職業ヲ離レ用水ノ便ヲ失レ
テ土質ノ肥沃ヲ減却シテ未タ必スシモ世人カ臆測ス
ルカ如キ利益ヲ期ス可ラスト信セザルヲ得ザルナリ

第十六回 制法者ハ須ラク人種ノ繁殖ニ注意ス

ベキ事

國士ノ口數ニ關涉セル規則ハ土地自然ノ情況ニ由テ
變通スヘキハ固ヨリ論ヲ俟タザル所ニシテ或ハ人法
ノ作用ヲ假ラザルモ天然ノ運化ニ由テ人烟自ラ繁殖
シ敢テ制法者ノ干涉ヲ要セザル邦土アリ夫レ氣候温
和ニシテ民口能ク蕃息シテ社會ヲ成スニ足ル時ハ何

ゾ法律ノ力ニ因テ以テ之ヲ催促スルヲ要センヤ然ル
ニ人烟ノ繁殖ヲ致スニ就テ氣候ノ温和ナルハ却テ地
質ノ肥饒ナルヨリモ更ニ著大ニシテ民口頻リニ増加
スルモ年穀登ラス一タヒ凶歉ノ災ニ値ヘハ忽チ億兆
ノ餓死ヲ招クヲアリ是レ即チ支那ノ情況ニシテ凶年
飢歲ニハ父ハ女子ヲ鬻キ提孩ヲ道路ニ棄ツルニ至ル
ヲ免レス交趾ニ於テモ亦同様ノ原因アリテ同様ノ效
果ヲ生セリ然レハ則チレノードノ著述ニ於ケル亞刺
伯ノ行客ニ倣フチ人類輪廻ノ大原ヲ考究スレヲ要セ
ザルナリ

セシムト云フモ全ク前文ノ理由ニ依テ然ルナルヘシ

第十七回 希臘及ヒ其住民ノ口數ヲ論ス

東洋諸國ニ於テ自然ノ運化ヨリ發スル所ノ效果ハ之ヲ我カ泰西ノ希臘ニ於テモ其政體ノ性質ニ依テ發生スルヲ視タリ抑モ希臘人ハ無數ノ府邑ヲ湊合シタル一大國民ニシテ各府各邑皆ナ其政體ヲ異ニレテ法律モ亦相同シカラス國民ノ精神ハ全ク征畧ヲ務メテ武

威ヲ輝カシ功名ヲ貪ボルノ一点ニアルヲ猶ホ今日ノ

瑞西和蘭日耳曼人ノ氣象ヲ觀ルカ如クソノ各府各邑

ノ共和政ニ於テ制法者ノ治圖ト認ムル所ハ内ハ府民

ノ福祉ヲ増進シ外ハ兵力ノ盛威ヲ揚ント欲スルハ外

ナラス專ラ武技ヲ訓練シ勇氣ヲ培養シテ以テ四隣ノ

府邑ニ起出センニ熱心盡力セリソノ版圖ノ狹隘ナ

ル斯ノ如クニシテ其事ケ得ル所ノ福祉ハ斯ノ如ク著

大ニシテ人口振々トシテ増殖シ其極却テ困難ニ堪ハ

サルノ景況ニ至レリ於是人民ハ已ムヲ得ス國外ニ向

テ移住ノ地ヲ覓メ或ハ今日ノ瑞西人ノ如ク兵士ヲ他

國ニ貸與シ百方術ヲ竭シ以テ人口ノ増殖ニ過クルヲ
抑制スル所以ノ措置ヲ施行セリ

希臘ノ諸共和邦中ニハ極メテ奇異ナル政體ヲ建立ス
ル所アリ其兵力ニ征服セラレタル人民ハ勝國ノ人ニ
糧食ヲ供給スルノ義務ヲ負荷セザルヲ得ズラセドモ

レ人ハヘロツト人ニクレタン人ハマリシヤン人ニテ

ツサリアン人ハベエホスト人ニ給養ヲ仰キタル即チ

其例ナリ又希臘人ハ其ノ奴隸ヨリ供給スル料食ニ缺

乏ヲ生セザランガ為メニ法律ヲ設ケテ自主人ノ口數

ニ制限ヲ立テ定額ニ超ユルヲ許サス恰モ方今ノ興

論ニ常備兵ノ員數ヲ制限シテ安ニ超過セシメザルト

一般アリラセドモン人ノ如キハ全ク奴隸タル農民ノ

給養ヲ仰ク所ノ軍團ナルヲ以テ其ノ國士ノ員數ニ制

限ヲ加フ可キハ事理ノ當ニ然ルヘキ所ニシテ若シ之

ヲ制限セザルキハ社會ノ利益ヲ全享スヘキ國士ノ口

數非常ニ増加シテ之ヲ扶持スル所ノ勞力者ハ終ニ其

員荷ノ甚タ重キニ堪ヘザルガ為メナリ

希臘人ノ治術ハ特ニ意ヲ人口ノ制限ニ注キテ其増減

ヲ酌量シプラトールハ其府民ノ員數ヲ五千四十人ト定

メ名譽ノ道廉耻ノ風及ヒ耆老ノ教訓ヲ以テ實際ノ形

勢ニ從テ或ハ之ヲ繁殖ヲ助ケ或ハ之ヲ制限ヲ立テ之
ニ加フルニ婚姻ノ規則ヲ立テ以テソノ人口ノ繁殖ニ
過キテ國家ノ負擔ノ加重スルヲ抑防セリ
アリストートルノ政論ニ曰ク若シ夫レ國法ヲ以テ棄
兒ノ禁令ヲ設クル時ハ須ラク其ノ鞠育スヘキ子女ノ
員數ニ制限ヲ立テザル可ラス果シテ其ノ出生スル所
ノ員數、國法制定ノ數ニ溢ル、ニ至ラハ妊婦ヲシテ胎
子ノ未タ形ヲ成サビルニ先テ流産セシムルヲ要スト
氏ハ後タクレタン人ガソノ子女ノ甚タ過多ニ至ルヲ
防止センガ為メニ施行シタル惡法ヲ記セリ其所業ノ

如キ實ニ天理人道ニ背キタレハ之ヲ茲ニ筆スルニ忍
ビス

又氏ノ論ニ曰ク國法ヲ以テ外國人、或ハ庶出ノ子女、或
ハ生母ノミ自主民タルモノ、擧タル子女ニ國士タル
ノ特准ヲ賜與スル所ノ地方ナキニアラズ然レモ若シ
人口繁殖シテ一定ノ口數ニ到ルヤ否ヤ忽チ此特准ヲ
止メテ賜與スルヲ無シト、加納達ノ野蠻部ノ如キハ最
モ獷狂ヲ極メテ囚虜ヲ焚殺スルノ殘暴アリト雖モ若
シ人口不足シテ居住スヘキ空舍アルハ之ヲ赦シテ
國士ノ員數ヲ補足スト云フ

ウイルリヤム、バツチー自ラ推算シテ謂ラク英人ノ自
國ニ於テ我身ニ價位ヲ備フルハ恰モ他國ノ人ヲア
ルジール佛ノ藩
屬地ニ携ヘテ賣鬻スルニ等シ六十
磅ト此價
位ハ特リ英國ノ實況ニ就テ然リトスルノミ或ル邦土
ノ如キハ全ク一人ノ價位ヲ備ヘザル所アリ之ヲ備ヘ
ザルノミナラス一身ヲ保ツト困難ニシテ却テ其躬ナ
キノ勝レルニ如カザル所アリ

第十八回 羅馬人ノ未タ起ラザル際ノ形勢ト人

ロトヲ論ズ

伊太利、西齊里、小亞細亞、凡爾乃至日耳曼ノ形勢ハ上古

ノ希臘ト死ト其趣ヲ同クシテ無數ノ小部落相合シテ
一國ニ成シ各部落ノ人口甚タ繁多ナルヲ以テ更ニ之
ヲ增加スヘキ法律ヲ要セザリキ

第十九回 地球人烟ノ減耗ヲ論ス

如は無數ノ小邦ハ悉ク一大帝國ノ併吞スル所ト爲リ
テ地球上ノ人烟漸ク減耗ノ衰運ニ傾ケリ此言ノ信否ヲ
證セント欲セハ試ニ伊太利、希臘二國ノ形況ヲ觀ヨ其
ノ未タ羅馬人ノ爲メニ征服セラレザル以前ニ比スレ
ハ人烟疎密ノ不同アル一目レテ知得スヘシ
リフサーノ古史ニ曰ク讀者必ス問フナルヘシ連戰連

敗ノ後、フォルシ人カ大軍ヲ徵募セシハ果シテ那邊ニ在ルヤト今日此一帶ノ地方ニ於テ一擲ノ戍兵ト羅馬人ノ奴隸トヲ除クハ殆ト人迹ヲ見サルノ荒野ニ過キザルカ如シト雖、往時ハ曾テ人烟繁殖戸口稠密ノ一都會ナリシナリ。〔按〕フォルシ人ハ伊太利ノ一部落ナルタルキ曰ク神明ノ託宣ハ已ニ廢止セリ其堂宇皆ナ顔壞シタルヲ以テナリ現今ノ形勢ニテハ希臘全部ニ於テ三千ノ兵器ヲ執ルヘキモノヲ得ルニ難シトストラポー曰クエビリユス及ヒソノ近傍ノ地方ハ全ク荒廢無人ノ僻境ト為レリ故ニ其地誌ヲ畧シテ記述

セザルナリ斯ク人烟ノ減耗セシハ其ノ由來スル所甚タ遠ト雖、氏今日ニ至テ尚ホ絶ハス羅馬ノ戍兵ハ住民ノ空屋中ニ宿營セリト其ノ此極ニ到ル原因ハ之ヲポリビユスノ書ニ就テ知ルヘシ曰クバウルス、エミリユスハ戰勝ノ勢ニ乘シテエビルユスノ府邑ヲ屠ル七十有餘ニシテ捕獲ノ奴隸无慮十五万人ナリト

第二十回 羅馬人ハ人類ノ繁殖ヲ勸奨スヘキ法律ヲ制定セザルヲ得ザル地位ニ在リシ事

羅馬人ハ他ノ國民ヲ滅亡セルカ為メニ復タ自ヲ滅亡

スル所トナレリ蓋シ始終戰鬥ヲ事トシテ強暴ヲ極メ
曾テ休養ノ術ヲ謀ラザルヨリ其疲弊ノ状ハ恰モ朝夕
手ニ釋テサル所ノ寶劍終ニ其銳鈍ヲ摩滅セシガ如シ
茲ニ拈出スル所ノ論題ハ羅馬人ガ其ノ既ニ減耗レタ
ル國士ノ員數ヲ補足セント焦慮盡カセシヲ謂フニア
ラス同盟聯合ノ舉ヲ謂フニアラズ其賜與シタル特准
ヲ謂フニアラス又ソノ國士ヲ養育スヘキ設置ヲ謂フ
ニアラス予カ論セント欲スル所ハ其國士ノ數ヲ増加
セズンテ唯ク兵士ノ數ヲ充足セシニ在リ蓋シ能ク法
律ノ作用ノレテ治術ノ方畧ニ適中セシノ以テ牴牾ノ

患ナキハ宇宙ヲ舉テ羅馬人ノ右ニ出ルモノアラサル
カ故 此一事ニ就テ其政畧ノ如何ヲ考究スルハ決シ
テ多辯ニアラズト信ズルナリ

第二十一回 羅馬法律ノ人類ノ繁殖ニ關涉スル
ヲ論ス

羅馬ノ舊律ハカノテ國士ヲ勸奨シテ婚姻ヲ希フノ心
ヲ振起セシメタリ其ノ元老院及ヒ民會ニ於テ此事ニ
就テ法律ヲ制定シタル數回ニ及ヒタルハデヨリガ
記述セルヲীগストス帝ノ演舌中ニ詳カナリ
ダラニシユス、ハリカルナシユスハフエイント人ガフ

エビーノ族類三百人ヲ鑿殺シテ孑然一孤子ノ外更ニ
殘喘ヲ存セシモノナレトノ言ヲ以テ信依ヲ置_クニ足ラ
スト爲セリ何トナレハ羅馬ノ國士タルモノハ其義務
トシテ婚姻ヲ結ハサル可ラス子女ヲ教育セサル可ラ
サルノ舊律ハ當時羅馬開國ニ
百七十年尚ホ實施中ニ在リタル
ヲ以テナリ

監察官ハ此法律ノ有無ニ關セズ只管人民婚姻ノ事ヲ
視察シ而ノ國家ノ形勢ニ從テ婚姻ヲ怠ルモノニ或ハ
耻辱_ハ以テハ刑罰ヲ以テ之ヲ督促シタリ

然ルニ羅馬ノ風俗漸ク頹壞ニ赴クニ從テ人心浮薄ニ

流レテ大ニ婚姻ノ禮ヲ行フ_ヲ厭惡セリ是レ蓋レ夫
唱婦_ノ眞樂ヲ解得セザル者ハ痛ク婚禮ノ踟躕ニ堪
ヘサルニ由テナリ故ニメテリヌス、ミジクスカ監察ノ
職ニ在リシ時ニ人民ニ向テ演說シタル言ニ曰ク人若
レ妻ナクシテ處生ノ道ヲ得ハ吾曹ハ塵世煩累ノ苦害
ヲ蒙ハルヲ免カルベケレモ奈何セン、造化ノ命ズル所
吾曹ハ結髮ノ毒アルモ其貞節ニ信依シテ伉儷ノ歡ヲ
盡ス_ヲ能ハス妻アラサレハ生計ノ道ヲ營ム能ハス故
ニ吾曹ハ須ラク一ノ歡樂ヲ放下シテ以テ血祀ヲ保續
スルノ大理ニ着目セザル可ラスト

監察ノ一職ハ固ト風俗ノ頽敗ヲ矯正センカ為メニ設
置シタルモノナルニ惡風汚俗人民一般ニ浸染シテ監
察官ノ權力其頽波ヲ挽回スルヲ能ハス終ニソノ淹沒
スル所ト為レリ第五卷十九回ノ
論ヲ參觀セヨ
抑モ羅馬ノ陵夷シタル原因ハ兵ヲ弄シ武ヲ驥シテ自
ラ疲弊ヲ招クニ由ルト雖モ其府内ニ騷亂ヲ生シ三頭
ノ專治乃至政黨ノ軋轢追放等ノ為メニ大ニ國脉ノ衰
弱ヲ致シテ國士ノ口數俄カニ減少シ内亂靜定ノ後シ
馬府ノ民口ヲ點檢セシメタル
ニハ五十万人ニ過キザリキ而モ婚姻セザルモノ十中
ノ八九ニ居レリ此惡弊ヲ治セント欲レシ一サル、オ一

クスト、ノ二帝ハ監察ノ憲職ヲ再興セシ而已ナラズ
其躬親ラ人民ノ風俗道義ヲ監察レシ一ザルハ多子ヲ
舉クル者ニ褒典ヲ賜ヒ而シテ四十五歳以下ノ婦人ニ
シテ婚嫁セス或ハ子ナキ者ハ宝玉ヲ用ヰテ服飾トス
ルヲ許サス衆興ノ特例ヲ得ルヲ禁止レタリ此法
制ハ虚榮ヲ慕フノ人情ニ籍リテ以テ孤棲獨居ノ弊ヲ
治療シタレハ其效用甚タ著大ナリ、オ一グストス帝ノ
法律ニ至テハ一層ノ嚴峻ヲ加ヘテ婚嫁セサル者ヲ罰
典ニ處シ羅馬開國七
百三十六年而シテ其ノ已ニ婚嫁シ及ヒ子女
ヲ舉ル者ノ賞典ヲ増加セリ此ノ諸法律ニタシトスハ

ジュリアン律ノ名ヲ下セリ是レ此ノ諸法律ハ全ク元老院平民會監察官ノ議定ニ淵源シタルノ故ナルヲ以テナリ

オーグストス帝ノ法律頒布以來無數ノ障礙ヲ生シテ其作用ニ抵抗シタルヲ以テ制定ノ後三十四年ニ至リ羅馬ノ騎士族舉テ之ヲ廢止スヘキヲ抗議セシニ依リオーグストス帝ハ一策ヲ生シテ府内ノ男女ヲ集會シ既ニ婚嫁シタル者ト未タ婚嫁セザル者トヲ兩班ニ分列セシメタルニ未タ婚嫁セザル者ノ數甚夥シクシテ其平均ノ得ス人民ノ之ヲ觀ルモノ一人トシテ驚愕

セザルハ死ク殆ド失心ノ體ナリキ是ニ於テ帝ハ昔日ノ監察官ト同様ニ嚴肅ナル結論ヲ人民ニ演述シテ曰ク

我カ億万ノ國士ハ既ニ病魔ニ攝シ去ラレタリ已ニ馬革ニ屍ヲ裹ミテ戰場ノ露ト化セリ若シ今日ニ際シテ荏苒トシテ婚嫁ノ約ヲ結ハザルハ國家ノ形勢果シテ何如ナルヘキヤ夫レ家屋樓閣ノ層々タルノミヲ指シテ都府ト稱ス可ラサルナリ都府トハ住民ノルノ謂ナリ汝ナ府民ハ寓言ニ記セルカ如ク人類自ラ地中ヨリ湧キ出テ汝ノ業務ヲ辦理スルヲ期

ス可ラザルナリ汝ナ府民ノ婚嫁セザルハ豈ニ唯タ
 獨身以テ一生ヲ終ラント欲スルノ真情ニ出ルモ、
 ナランヤ蓋レ一人トシテ他人ニ依頼セス獨リ飲食
 睡眠スル者ハアラサルヘケレハナリ汝ナ府民ノ底
 意ハ蓋シ婚姻ノ大禮ヲ行ハズ只情欲ノ私ヲ專ラニ
 シテ生涯ヲ涉ランヲ希望スルニ過キサルヘシ、汝
 ナハ舊俗ニ因循シテ終身不娶ノ巫尼ヲ學ハント欲
 スル乎既ニ身ヲ法門ニ委ヌルカラハ若レ貞節ノ道
 ヲ犯セハ破戒ノ罰ヲ受ケザルヲ得ザルナリ之ヲ要
 スルニ汝ナ府民ノ風儀ハ影響ヲ國外ノ人ニ及ボス

ト否トラ論セズ國士ノ不良タルヲ免カレサルナリ、
 抑モ予ノ一途ニ冀圖スル所ハ此ノ共和政ヲ不朽ニ
 維持スルニ外ナラズ、予ハ已ニ法制ニ遵ハサル者ノ
 罰典ヲ嚴ニレタリ然レモ其賞典ニ至テハ之ヲ増加
 スヘキ有徳者ノ在ルヤ否ヤヲ知ラザルナリ今日ハ
 少ナクモ一千人ノ性命ヲ失フヘキ惡風流行ノ時ナ
 リ而ルモ汝ナハ尚ホ妻ヲ娶ラザル乎尚ホ子女ヲ養
 育セザル乎

オーグストス帝制定ノ法律ハ帝ノ諱ヲ取リテシユリ
 アト稱シ又諸統領ノ在職中ニ制定シタルモノハソノ

姓名ヲ取テ之ヲパピヤ、ガツヒイヤト稱シタリ然ルニ
諸統領ハ其撰舉ニ膺ルハ皆ナホタ婚禮ヲ行ハス子女
ヲ舉ケスレテ其身已ニ不正ヲ免レサルカ故ニ益惡弊
ノ增長ヲ見ルノミナリ

右ニ掲載セルオーグストス帝ノ誥諭ハ一部ノ律典ニ
シテ一切婚姻ノ事ヲ調整スル規律ノ全體ナリト謂フ
モ敢テ不可ナキナリ故ニ是ヨリ先キニ制定シタルジ
ヨリヤン律モ自ラ其中ニ包括セラレ作用ノ區域甚タ
廣大ニシテ百般ノ民事ニ影響ヲ與ヘタルヲ以テ羅馬
民法ノ最モ純粹ナル部分ト成レリ

此律典ハ已ニ埋滅シテ今日全豹ヲ窺フ能ハス唯タ
其一斑ヲ珍重ナルユルピヤン律ノ殘篇斷簡ノ中及ヒ
パピヤン律ノ著撰者ヨリ編纂シタル法典彙集及ヒ此
古律ヲ引證シタル諸史家ノ著書及ヒ之ヲ廢止シタル
テオドシユス帝ノ成典及ヒ諸教祖カ專ラ來世ノ福果
ヲ希圖スル熱腸ヨリ此ノ現世ノ事務ノミヲ掌理スル
法律ヲ論駁シタル書冊ニ散見スルヲ看出スアルノミ
此ノ諸法律ハ其部類頗ル浩濔ニシテ吾人ノ知り得ル
所已ニ三十五部ノ多キアリ然レモ是等ハ論題ノ本旨
ニ非サレハ之ヲ擱キテ論セズ唯タフーリユスゼリユ

スノ説ニ據ルニ法律上ニテ准許セル名譽賞典ニ關係
スル部類ハ其第七ニ列セリト云フ

羅馬人ハ概シテ羅基頓ノ殖民地ナル雅典ヨリ移リ來
レルモノナレバ雅典ノ故俗舊法自ラ留存シテ極メテ
耆老長者ヲ尊敬シ之ニ榮譽名望ヲ付與シタリ然ルニ
風俗頽敗生齒衰減スルニ至テハ則チ從來耆老長者ニ
自與スル所ノ殊典特准ヲ移シテ之ヲ國士ノ婚禮ヲ行
フ者及ヒ子女ヲ生育スル者ニ賜與スルト爲レリ其
法先ツ子女ノ有無ニ拘ラス苟クモ婚姻ヲ行フ者ニハ
所謂夫主ノ權ヲ賜與シ一二ノ子女ヲ生育スル者ニハ

更ニ他ノ特准ヲ賜與シ三人以上ヲ生育スル者ニハ一
層著大ナル殊典ヲ賜與シタリ此三典ハ自ラ階級アリ
テ之ヲ紊ルコトヲ得フ三人以上子女アル者ノ特准ハ婚
禮ヲ行フタル人ノ永久ニ享有スル所ニシテ譬ハハ劇
場ニ在テ殊別ノ觀席ニ坐スルカ如キ是レナリ又其上
ニ子女アル人ノミノ享有スヘキ特許ヲ獨得スヘシ而
ソ既婚ノ人ハ唯タ多數ノ子女ヲ有スルモノニ一步ヲ
讓ラサルヲ得ズ

其特准殊典ノ區域ハ極メテ廣大ニシテ凡ソ婚禮ヲ行
フテ數多ノ子女アル者ハ始終職業上或ハ官職上ニ於

テ他人ヨリモ一層ノ尊敬ヲ受ケ其ノ統領ノ職ニ撰舉
セラル、モノモ多ク子女ヲ有スル人ハ行列ニ斧鉞ヲ
持セシムルノ榮譽ヲ得、ク又己カ便宜ニ從テ赴任ス
ハキ州郡ヲ撰擇スルノ權ヲ得、シ且其ノ元老院ノ議
員ニ登ルモノモ亦多ク子女ヲ有スル人ハ院中ノ名版
上第一ニ姓名ヲ掲ク而己ナラズ議會ヲ開クニ方テ第
一ニ意見ヲ吐露スルヲ得、シ又子女ヲ生育スルニ由
テ一定ノ殊典ヲ得、シハ其父タルモノハ官途ニ採用セ
ラル、モ尋常ノ人ヨリモ迅速ナリ又府下ノ住民ニシ
テ三人ノ子女ヲ生育スルモノハ一切煩劇ナル官職ニ

就クハキ義務ヲ免カルハク又自主ノ婦人ニシテ三人
ノ子女アルモノ及ヒ解放セラレタル奴婢ニシテ四人
ノ子女アル者ハ齊シク畢生ノ後見人ニ拘束セラル、
シテ免ルヘシ

羅馬人ハ婚禮ヲ行フニ由テ賞典ヲ受ル、斯ノ如キノ
以テ之ニ背クモノハ亦其罰ヲ蒙ムラザルヲ得、ス即チ
婚禮ヲ行ハザルモノハ一切親屬ニアラザル人ノ遺囑
ニ由テ利益ヲ受領スルヲ得、ス其ノ婚禮ヲ行フテ子
女ナキモノハ唯タ其半額ヲ受領スルノミ、故ニブル
ルキノ言ニ曰ク羅馬人ハ已レノ遺産ヲ得、シカ為、ニ

婚姻スルノミニシテ遺産ヲ嗣クハキ人ヲ得シカ爲メ
ニアラズト

夫婦ノ間互ニ遺囑ヲ立テ以テ受領スヘキ利益ハ多少
法律ノ制限スル所トナリ若レ夫婦ノ間ニ子女アル時
ハ財産ノ全額ヲ受領スマシト雖モ若レ子女ナケレバ
當ニ婚姻ヲ結フノ故ヲ以テ其十分ノ一ヲ受領スルニ
過キス若シ又夫婦ノ中ニ先人ノ子女アルハ各子女
ノ爲ノニ更ニ十分ノ一ヲ受領スルヲ得ベシ
若シ國事ニ非スシテ夫其妻ヲ棄ツルハ妻死スルモ
其遺産ヲ承襲スルヲ得ス

法律ニテ夫或ハ婦ノ配偶ヲ失フモノ、再婚スル期限
ヲ二年ト定メ離婚セルノ場合ニ在テハ之ヲ一年半ト
定ム又父タル者其子女ノ婚姻ヲ結フヲ許サズ或ハ之
ニ嫁資ヲ分與セサルハ宰官ニ於テ其承諾ヲ要取ス
ベシ

二年以上ノ契約ニ由テ婚姻ヲ議定スルヲ許サズ又
十二歳以下ノ幼婦ヲ娶ル可ラザルヲ以テ十歳ニ達セ
サレバ之ト婚姻ノ契約ヲ結バテ得ズ蓋シ法律ノ精神
ハ婚姻ノ大事ヲ兒戲視セシノス且一片ノ契約ノミニ
依テ結婚ノ特准ヲ享用セシメサルカ爲メナリ

法律ニ於テ六十歳ノ男子ニシテ五十歳ノ婦人ヲ娶ル
 一ヲ許サス是レ婚姻セル人ニハ著大ナル特准ヲ賜與
 スルヲ以テ生機已ニ竭タル人ニ之ヲ享有セシムルハ
 實ニ無益、一タルヲ以テナリ夫ノカルグイシヤト稱
 スル元老院ノ議定書ニ五十歳以上ノ婦人ト六十歳以
 下ノ男子ト婚姻スルハ配偶ノ當ニ非スト布告シタル
 全ク此理由ニ外ナラサレハ五十歳以上ノ婦人ニシ
 テ婚姻スルモノハ此法律ニ觸レサルヲ得ス、チベリユ
 人帝ニ至テパピヤン律ヲ一層嚴厲ニシテ六十歳ノ男
 子ニ五十歳以下ノ婦人ヲ娶ル一ヲ禁止セリ故ニ男子

六十歳ニ到レハ何等ノ事情アルモ此法律ニ背キテ婚
 姻スレバ必ス罰典ニ罹ルヲ免カレス後クローシユス
 帝ノ治世ニ至リ始テ之ヲ廢棄シタリ
 要スルニ此等ノ規律ハ全ク伊太利ノ如キ温暖ナル風
 土ニ適應スルモノニシテ之ヲ北部諸邦ニ施行ス可ラ
 ス何トナレバ寒地ニ在テハ男子ハ六十歳ノ老齡ニ傾
 クト雖其氣力尚ホ強壯ニシテ五十歳ノ婦人モ未タ
 之ヲ生機既ニ竭タリト謂フヘカラザレバナリ
 オーグストス帝ハ人民ヲレテ其妻ヲ撰擇スルノ際徒
 ニ苛察ナル制限ニ苦シマシメサランガ為メニ生來自

主民ノ名籍ニ列シ而シテ元老議員ノ顯職ニ登ラザル人
ニハ奴隸ノ分限ヲ解放セラレテ自主民トナレル婦
女ヲ娶ルヲ許容シタレモパピヤン律ニ據レハ元老
議員ハ之ヲ娶ルヲ許容セザリキ蓋シユルピアニ
時世ヨリシテ既ニ自主權ヲ有スル男子ニ或ハ淫行ノ
間アル婦女或ハ戲場ニ登テ演戲ノ業ヲ營ミタル婦女
或ハ刑典ニ處セラレタル婦女ヲ娶ルヲ禁止スルカ
為メナリ想フニ此法度ハ元老院ノ議定書ニ基キテ施
行シシヲ疑フ容ル可ラス何トナレハ共和政ノ頃ニ於
テ監察ノ憲官アリテ風俗道義ヲ砥勵シ苟クモ失行醜

聞ノ將ニ醸生セルトスルアレハ忽チ之ヲ懲治シ或ハ
之ヲ未發ニ抑防セシカ故ニ曾テ斯ノ如キ法律ノ制定
ヲ要セサレバナリ

コンスタンチン帝制定ノ法律ハパピヤンノ禁令ニ揭
クル所ノ元老院議員ニ新平民ト結婚スルヲ許サハ
ルノミナラズ國家ノ顯官ニ就クモノヲモ亦之ヲ禁止
シテ當時ノ法度ト為セリ故ニ該帝ノ治世ニ在テハ唯
タ生來ノ自主民ヲ除クノ外已ニ多少ノ制限ヲ解キテ
寛裕ノ點ニ傾キシニジユスチニヤン帝ノ即位ニ及テ
總テ從來ノ法律ヲ一掃シテ貴賤貧富ヲ論セス一般ニ

結婚スルコトヲ許容シ之ニ依テ人民ハ男女配偶ノ自由
ヲ得テ却テ國家ノ命脉ヲ痿痺セシメタリ
然リ而メ法禁ニ背キテ婚姻セシ者ニ加フ所ノ罰典ハ
恰ミ未婚ノ者ニ加フ所ノモノニ異ナラズ即チ犯人ハ
其妻死スルモ粧奩ヲ官沒セラレテ之ヲ兼襲スルコトヲ
得ス正シク民權ノ一部ヲ剥奪セラルハナリ
オーストリア帝ハ法律ニ於テ財産ヲ兼襲シ及ヒ遺物
ヲ享受シ能ハズト裁判セラレタル人ノ所有ヲ舉テ國
幣ニ沒入スベシト決定シタルカ故ニ該帝ノ法律ハ之
ヲ政法、民法ノ部類ニ列スルヨリモ寧ロ理財法ト稱ス

ルヲ至當トスヘキナリ而ノ人民ハ往々ソノ稅斂ノ厚
キニ苦シミ且貪官汚吏ノ魚肉タルヲ怨恨憎惡シテ措
カス是ニ依テチベリユス帝ノ治世ニ在テハ法律ノ苛
察ヲ寬弛センコトヲ要求シテ帝ノ治世ニ在テハ告發
人ニ國幣ヨリ褒賞金ヲ賜フコトヲ減省センコトヲ要求シ、
トライジャン帝ノ治世ニ在テハ告發人ノ強取勒索ヲ
禁止スベキコトヲ要求シ、セウエリユス帝ノ治世ニ在テ
ハ法律全體ノ改正アラシコトヲ要求シ、民法學士ノ輿論
モ之ヲ以テ苛虐不當ト公認シ從テ法司ノ裁判ニ於テ
モ嚴密ニ本律ヲ施用スルコトヲ皆ナ情狀ヲ斟酌輕減

スルヲト為レリ

以上ノ諸帝ハ人民ニ夫權有子ノ特准及ヒ三子ヲ有スルノ殊典ヲ賜與シテ法律ノ作用ヲ減省シ甚レキハ右等ノ人ニ罰則ヲ免カルヘキノ特許ヲ附與スルニ至レリ然リト雖モ公衆ノ利益ノ為メニ制定セル規律ノ如キハ國帝ト雖モ之ヲ寛弛スルヲ能ハザルガ如キモノアリ

亦諸帝ガ宗教上ニ於テ必ス童身不娶ノ戒ヲ持スル女巫ニ有子ノ特准ヲ賜與シ或ハ結婚ノカナキ兵卒ニ既婚者ノ享用スベキ殊典ヲ賜與シタリシハ實ニ情勢已

ム可ラサル所ニシテ之ヲ變通ノ措置ト謂ハサル可ラ

ズ且當初國帝ニ限リテ民法ノ為メニ其躬ヲ束縛セラ

レザルノ慣習アルヲ以テオーグストス帝ハ撰舉投票

ノ權及ヒ遺産相續ノ權ヲ制限セル法律ニ拘束セラル

ハトテ免除セラレタリ但シ特殊ノ場合ニ在ラサレハ

國帝ト雖モ此特權ヲ享用スルヲ能ハサリシカ終ニ尋

常一様ノ例トナリテ何人ヲ論セス之ヲ賜與スルヲト

ナレリ

既ニシテ哲學ノ諸派國中ニ勃起スルヨリ民情自ラ

高遠ニ驚テ塵世ノ事務ニ汲々タルヲ屑レトセス再ヒ

共和政ノ時ニ於ケルカ如ク上下協同レテ外ハ戰鬥ヲ
務メ内ハ文學ヲ脩ムルノ風俗アルヲ見ル可ラス於是
論談動モスレハ性命ノ空理ニ涉リテ脩身齊家ノ實行
ヲ顧ミス其弊實ニ言ノヘカヲサルモノアリシガ是時
ニ方テ基督教世ニ出テ理學諸派ニ於テ端緒ヲ開キタ
ル所ノ真諦ヲ大成シ以テ一般ノ弊習ヲ改良セリ
基督教起リテ其温和ナル容貌ヲ法律ノ表面ニ銘記セ
リ是レ羅馬帝國ノ政畧ハ僧侶ト密接ノ關係ヲ有シタ
レバナリ其證ハテヲドレヤンノ律書ノ如キ基督教ヲ
奉スル諸帝ノ制誥ヲ纂輯セレニ過キササルヲ以テ之ヲ

微知スヘキナリ

コンスタンチン帝ヲ讚美セル者ノ言ニ曰ク陛下制定
ノ法律ハ帝ニ罪惡ヲ懲治シ風俗ヲ矯正スルノミナラ
ズ亦能ク彼ノ權謀術數ヲ以テ質撲ナル人民ヲ籠絡ス
ルヲ單一ノ目的トシタル古律ヲ一筆ニ削除セリト
コンスタンチン帝カ法律ヲ改正シタル底意ハ基督教
義ノ完全無缺ナルヲ觀テ新クニ之ヲ創立セント欲ス
ルノ意亦其一ニ居ルヤ必然ナリ何トナレハ其法制ニ
於テ僧正ニ一定ノ權力ヲ與ヘ以テ教院裁判ノ種子ヲ
播キ又父ノ其子ニ讓ルベキ財産ニ制限ヲ加ヘ以テ父

權ヲ減殺シタルカ如キ全ク基督教ヲ創立セント欲ス
ルニ在リ蓋シ新立ノ教義ヲ宣布スルニハ舊教ニ歸依
スルノ心最モ薄弱ナル少年ノ獨立ヲ勸奨セサルヲ得
サルガ為メナリ

基督教義ヲ完全無缺ナリト信任レタルハバビヤン律
ノ罰例ヲ廢止シ未ク婚姻セサル者ト已ニ婚姻シテ子
女ナキ者トヲシテ同シク此律ニ罹ルヲ免カレシメ
タルヲ以テ着ルヘキナリ

教法史家ノ説ニ曰ク諸ノ法律ハ恰モ人口ノ増減ハ全
ク天運ノ盈昃ニ係ルヲ感覺セシメズレテ唯タ吾人

ノ注意盡力ヲ以テ之カ繁殖ヲ致シタルカ如キ效果ヲ
結ヘリト

教義ハ一種繁殖ノ一点ニ向テ非常ノ大作用ヲ顯スモ
ノニシテ或ハ猶太、回、瓦爾、支那人ニ於ルカ如ク著シ
ク生齒ノ增多ヲ致シ或ハ羅馬人が新タニ基督教ヲ奉
セシ時ニ於ルカ如ク其漫濫ノ勢ヲ抑制スルヲアリ
蓋シ諸教ノ主義タルヤ尋常ノ人ノ容易ニ實行シ得ハ
キニ非サルヲ以テ到ル處トシテ道德ノ最上級即チ人
類ノ肉慾ニ節制ヲ加フハキヲ諄々勸誡セサルハ無
レ

コンスタンチン帝ハ未タ全ク夫婦ノ間、ソノ生育セル
子女ノ口數ニ從テ贈遺ノ數ヲ増加スヘキ法律ヲ廢棄
セズ漸クテラドレユス帝ヲ埃テ全ク之ヲ刪除セリ
ジニヌチニヤン帝ハパビヤン律ニ據リテ禁止セル所
ノ婚姻ヲ有效ナリト布告セリ而ノ此法律ハ人民ニ必
ス再婚スヘキノ義務ヲ負シメタレド亦再婚セザル者
ニモ一定ノ特准ヲ賜與セルヲアリ
古制ニ據レバ男女婚嫁レテ子女ヲ生育スルハ人生天
賦ノ權理ニシテ何等ノ事情アルモ決シテ之ヲ褫奪ス
ルヲ得ス故ニ若レ人アリ終身不娶ノ契約ヲ立テ或ハ

遺産ヲ受領スルモノ或ハ舊主人ヨリ奴隸ノ手限ヲ解
放セラレテ自主ノ民トナルモノニ終身婚姻セズ子女
ヲ生育セザルノ誓詞ヲ為シムルモハパビヤン律ノ在
ルアリテ其契約誓詞ヲ抹殺レテ全ク無効ト為セリ據
以觀之基督教創立ノ後ニ畢生寡居ノ一句ヲ契約上ニ
公認スルハ原ト古制ニ相反スルモノニシテ道德ノ完
全ヲ見点トシタル諸帝ノ制誥ニ淵源セルヲ明瞭ナリ
但シ羅馬ニ於テ既婚ノ人及ビ子女ヲ生育スル者ニ賜
與シタル殊典特准ヲ廢棄セシメ之ヲ當時ノ法律ニ微
シテ其明文ヲ看出シ能ハスト雖モ已ニ孤棲獨居ヲ以

テ高行美事ナリト仰キ視ルノ時運ニ到レハソノ婚姻
ヲ視テ敢テ榮譽嘉ス可キノ事ト為サズ終ニ叔稅官ヲ
要シテ巨額ノ國入ヲ減損シテ孤棲獨居ノ罰典ヲ廢止
スルニ到ル上ハ何ノ獨リ婚姻ヲ勸奨スルノ賞典ヲ廢
止セサルノ理アラシヤ其舊法ヲ當時ニ墨守セサルヲ
知ルヘキノミ

教義上一孤棲ノ一事ヲ許容セルヤ否ヤ忽チ終身不娶
ヲ以テ人生缺ク可ヲサルノ德行ト認ムルニ至レリ此
一事ニ就テハ頗ル論鋒ヲ向クヘキ所ナキニアラズト
雖氏已ニ教義上ニ之ヲ許容スル以上ハ法門誹議ノ罪

ニ陷ランヲ恐レテ予ハ之ヲ黙カニ附セサルヲ得ガ
ルナリ然リト雖氏若シ其孤棲獨居ヲ以テ淫褻醜行ヲ
擅ニスルノ護身符トナシ男女互ニ性情ニ任セテ肉慾
ニ使役セラレ人倫ノ大本タル和合ノ道ヲ棄テ邪徑ニ
趨リテ世ニ生活セント欲スルカ如キモノアラハ決シ
テ之ヲ黙止ニ付セザルナリ

夫レ婚姻ノ數ハ愈減スルニ從テ既婚者ノ風俗愈頹敗
スルモノナリ之ヲ再言スレハ婚姻シタル者ノ數益減
少スレハ則チ夫妻ノ間貞節ヲ守ルモノ益稀少ナルヲ
恰モ盜賊ノ數多キヲ加フルニ從テ則チ盜罪ヲ犯スモ

ノ更ニ多キヲ見ルガ如シ是レ性理ノ大則ナリ

第二十二回 棄兒ノ事ノ論ス

棄兒ノ事ニ就テハ羅馬人ノ政術ヲ善良ノ極ト謂フ可シ、
シ、ガヲニシユス、ハリカルナシユスノ説ニ曰ク國祖ロムリユスハ國士タル者ヲシテ必ス其ノ諸男子ト長女トヲ教育スベキ義務ヲ負荷セシメ若シ產出スル所ノ嬰兒不具ニレテ人體ヲ備ハス或ハ奇形怪狀ニシテ人視ス可ラサルハ之ヲ隣保五名ニ檢視セシメタル後ニ於テ始メテ棄棄スルヲ許容セリ
ロムリユスハ亦タ國士タル者ニ三歲未滿ノ子女ヲ殺

スヲ允許セザリキ是レ人ノ父タルモノニ子女生殺ノ大權ヲ附與セルノ法律ト及ビ子女ヲ道路ニ棄棄スルノ禁令トヲ交和シテ相悖ラザラシノタルモノナリ
更ニガヲニユス、ハリカルナシユスノ書ニ於テ國士タルモノハ必ス婚姻スベキノ義務アリ且子女ヲ教育セサル可ラザルノ法律アリテ羅馬國二百七十七年ニ實踐セラレシト及ビ羅馬ノ慣習法ニ於テロムリユスガ其人民ニ女兒ヲ棄棄スルヲ許容セル法律ニ制限ヲ加ハタルヲ看出シタリ

羅馬國三百一年ニ制定セル十二銅表中ノ棄兒律ハ

今其規則如何ヲ知ルニ由ナシト雖モシセローガトリ
ビユーシ官ヲ論ゼル文章ニ異状ノ嬰兒産レテ人視ス
可ザルハハ分婉ノ後直チニ之ヲ拉殺シテ妨ケナキ旨
ヲ載セタリ之ニ由テ考察スルニ苟クモ産兒ノ異形怪
状ニアラザルヨリハ必ス之ヲ鞠育セザルヘカラサル
ノ主意ニ外ナラスシテ其律典ハ敢テ古制ヲ更改スル
ニ非ザルヲ知ルニ足レリ
タシトスノ言ニ曰ク日耳曼人ハ絶テ子女ヲ委棄スル
ヲ無シ蓋シ其人民中ニ流行スル良風美俗ノ映響ハ迥
カニ他ノ諸國ノ良法美律ノ勢力ヨリモ效用着大ナレ

ハナリト然ラハ則チ羅馬人ハ棄兒ノ惡俗ヲ矯正セシ
カ爲メニ法律ヲ制定セシモ終ニ之ニ依遵シ能ハザリ
シナリ但シ羅馬ノ法律ト雖モ敢テ棄兒ヲ許可シタル
ニ非サレバ共和ノ政衰頽シテヨリ人民ハ奢侈ノ爲メ
ニ自由ノ精神ヲ喪失シ夫ノ富財ノ能ク民間ニ分賦流
通シテ一所ニ壅滯セザルヲ貧窮ト誤認セシニヨリ父
タルモノ其家族ニ財産ヲ讓與スルヲ損失ト妄信シ家
族財産ノ二者全ク相分離シテ遂ニ此惡俗ノ流傳シタ
ルヲ論ヲ俟タスシテ明カナリ

第二十三回 羅馬滅亡ノ後ニ於ケル 宇内ノ形勢ヲ論ス

羅馬人カ其國士ノ員數ヲ増殖センカ爲メニ制定セシ
所ノ規律ハ能ク共和ノ政體鞏固隆盛、膽畧勇猛、氣力剛
強ニシテ一國ノ榮譽ヲ尚ヒ人類ノ懿徳ヲ重スルノ間
ハ著大ナル效果ヲ結成セシト雖、爾後國勢陵夷シテ僅
カニ共和政ノ餘燼ヲ存レ、一國無政ノ亂世ト爲リ、兵隊
專權ノ政ヨリ、一君獨裁ノ勢ニ移リ、暗君弱主、王位ニ登
リ、庸愚滿朝、鬼神ヲ妄信スルニ至リ、ソノ由來スル所甚
タ久遠ニシテ如何ナル金科玉條タリト雖、其衰運ヲ
將ニ傾カントスルニ挽回シ能ハザルナリ、實ニ羅馬人
ハ特ニ字内ノ氣運ヲ衰弱ニシ人民ノ氣力ヲ痿痺セシ

メ而メ后チ之ヲ獲狂ナル蠻民ニ卑與シテ其魚肉ニ供
セシニ過キスト謂フモ亦敢テ不可ナルナシ故ニ幾突
人、ゲット人、亞刺伯人、韃靼人ハ踵ヲ接シテ蜂起シ交羅
馬ヲ蹂躪シテ終ニ蠻民ヲ以テ蠻民ノ攻メ各、吞噬搏擊
ヲ逞タレテ互ニ衰敗滅亡ニ就クノ状ハ恰モ小説ニ記
スルガ如ク太古洪水ノ後、介士地中ヨリ湧出シテ互ニ
相闘ヒ相殺シタルニ異ナラズ

第二十四回 歐洲ノ人口變更ナル所以ヲ論ス

歐洲昔日ノ形勢就中シヤルレマンノ霸業始メテ成リ
大陸上ニ一大帝國ヲ建立セシ時ニ方テハ如何ナル具

眼者ト雖此今日ノ如キ大小相制シ國力平均ノ一世界
ヲ目撃スヘキト想像スルモノアラサルベシ然レモ當
時政體ノ然ラシム所ロ一帝國ヲ分割シテ無數ノ小王
國ヲ成シ之カ領主或ハ君長タルモノハ村落府邑ニ居
住スト雖此人口ノ繁殖ヲ致サレハ富强ノ實ヲ謀ル
可ラサル而已ナラス殆ト封土ノ安全ヲモ保守シ難キ
カ故ニ唯々其臣民ヲ撫育シテ富庶殷實ナラシムヲ是
レ務メタルヨリ當時政令未タ完カラス貿易未タ開ケ
ス且ツ兵革虛日ナキノ亂世ニ在ルモ歐洲ノ諸邦僉ナ
駿々上進ノ勢アリテ人烟漸ク繁榮シ富庶ノ佳域ニ赴

キタルヲ更ニ現今ノ形勢ニ軌クレモノアリ

此論題ヲ究メ盡シテ餘蘊ナキニ到ルハ敢テ企及スル
所ニアラサレハ爰ニ唯々歐洲諸邦ノ人民ヲ集成シテ
十字軍ノ遠征ニ從事セシタル軍團ノ非常ニ大勢ナ
ルヲ引證シ以テ前文ノ局ヲ結フハシ、ブツフエンドルフ
ノ說ニ據レハ佛王查理第九世ノ治世ニソノ國人ノ數
ハ二千萬人ニ過キスト
斯ク人烟ノ減耗シタル原因ハ果シテ何ニ在リヤト問
ハ、強國崛起シテ數多ノ小邦ヲ併吞シタルニ外ナラ
スト答ヘシノミ、何トナレハ昔時佛國ノ市邑ハ各自ニ

一都城ノ形状ヲ成シタリシモ今日ニ至テハ輦輦ノ下
ニ輻湊シテ一大都城ヲ成シ往日ハ各都城ニ一部ノ權
カヲ集メテ自治ノ體ヲ備ヘタリシガ今ハ之ヲ一大都
城ニ集合シテ各市邑ハ僅カニ其枝節タルニ過キス而
ノ其集合ノ中心ニ殆ト一國ノ形勢ヲ具有スルニ似タ
リ

第二十五回 前回ノ續キ

輓近二百年來歐洲諸邦ニ於テ航海ノ業著シク進歩シ
之ニ由テ大ニ住民ノ口數ヲ増加シタレハ亦之ヲ為メ
ニ大ニ減耗ヲ免レサル所アリ和蘭一國ヲ以テ之ヲ例

スルモ其通商貿易ノ為メニ年々印度地方ニ送遣スル
所ノ海客航夫甚ク夥シク而メ再ヒ歸國スルモノハ三
分ノ二ニ至ラス其餘ハ羈旅ノ游魂ニ化シ否ラサレハ
身ヲ印度ニ終ラサルナシ然レハ自餘ノ諸國ト雖モ航
海貿易ヲ營ム所ニ於テハ其事情皆ナ然ラザルモノナ
カルベシ

但シ專ラ航海ノ業ヲ務ムル所ノ一國ヲ視テ以テ歐洲
大陸ノ形勢ヲ臆斷ス可ラス蓋シ英國ノ如キハ貿易ノ
業極メテ繁昌スルヨリ四隣ノ諸邦皆之ニ往來シテ
利益ヲ獲ンコトヲ冀圖シ海客航夫四方ヨリ輻湊スルヲ

以テ人烟日ニ繁密ヲ加フヘシト雖モ大陸ニ在テハ然
ラス人民所奉ノ宗教相同シカラム大海廣漠アリテ球
上ノ諸國ヲ隔絶スルカ故ニ容易ニ其人口ノ虧缺ヲ填
補スルコト能ハサルナリ

第二十六回 將來ノ效果

前文ニ縷々論述スル所ノ旨趣ニ依テ目今歐洲ノ諸邦
ヲ通觀スレハ實ニ人類ノ繁殖ヲ致スヘキ法律ヲ制定
セシムハアル可ラサルノ形勢ナリト斷定セサルヲ得
ス往昔希臘人ノ治術ニ於テハ國士ノ口數過多ナルヨ
リ國家ノ不利ヲ致ヒシコトヲ患ハタレモ今日ハ之ニ反

シテ人口増殖ノ一途ニ汲々タルノ治圖ヲ施サバ爾可
ラザルノ時ト謂フハシ

第二十七回 佛國ニ於テ人類ヲ繁殖セシメンカ

為メニ制定シタル法律ヲ論ス

路易王第十四世ハ十子以上アル人ニ特典ヲ賜ヒ養老
金ヲ給スル制度ヲ定メタレモ之ニ由テ著シク人口繁
殖ノ實效ヲ奏セサリキ若シ此趣意ヲシテ國民ノ精神
ニ貫徹セシメンニハ必ス羅馬人ノ舊制ニ則リテ信賞
必罰ノ二典ヲ設ケサレハ能ハス

第二十八回 何等ノ方法ヲ以テ人烟ノ減耗ヲ遏

止スヘキヤ

カノ戰亂、惡疫、飢饉、ノ若キ不測ノ災害ハ頗ル生齒ノ減
耗ヲ致スアルモ人民ノ幸ニ一死ヲ免カル、者ヲシ
テ大ニ恐戒スル所アリテ精神ヲ抖擻シ職業ヲ勤勉シ
以テ後來ノ豫備ヲ希圖セシムルニヨリ災害ハ却テ人
民ノ發奮心ヲ喚起スルノ美果ヲ結ビテ國力財源是ヨ
リ一層ノ富強ヲ増スモ亦料ル可ラス然レモ政治風俗
ノ不善ニ淵源シテ然ルモノニ至テハ殆ト挽回ノ策ヲ
施ス可ラズ何トナレバ政道宜ヲ失シ教化行レザルモ
ハ人民知ラズ識ラズ流弊ニ陷リ苛政ニ害メテレ常ニ

貧窮ノ中ニ生レテ困苦ノ間ニ死シ而シテ其ノ然ル所
以ノ原因ヲ曉得セス之ヲ信セスムハ眼ヲ放テ專制政
治ノ暴虐ナルト僧徒ノ愚民ヲ籠絡スルトニ依テ衰弱
セル諸國ノ景況ヲ見ヨ、一トレテ此悲觀ヲ現セサルモ
ノ無カルヘキナリ

斯ク衰頹セル國運ヲ挽回セント欲スルハ猶ホ胎内ノ
兒ニ一臂ノ助力ヲ望ムカ如ク決シテソノ事ヲ濟スニ
足ラサルヲ知ルベシ蓋シ零落流離ノ民ハ敢為ノ氣力
ニ乏シク懶惰ニレテ職業ヲ勤メザルカ故ニ一國ノ食
ヲ足スヘキ土地ヲ有スルモ之ニ資テ一家ノ老幼ヲ養

フ能ハス其人民ハ恰モ不用ノ荒野石田ヲ擁スルカ
如クニレテ一畝モ我カ所有ノ不動産ト為スト能ハス
終ニ僧徒豪民ノ為メニ其ノ荒廢レタル土地ヲ兼併セ
ラレ常ニ流寓饑渴ノ患ニ迫ルヲ免カレサルモノナリ
此國脉ヲ療養スルニ唯タ一法アリ即チ羅馬人ノ政圖
ヲ學ビテ其一地方ニ設ケシ所ノモノヲ取テ之ヲ全國
ニ施行シ其ノ豐稔ノ日ニ觀察セシ所ノ事ヲ以テ之ヲ
窮乏ノ時ニ施行スルニ在リ一國ノ田地ヲ舉テ貧民ニ
分賦レ毎戸ニ開墾耕耘ノ物料ヲ給與シ苟クモ之ヲ収
受スル人絶テ無キニ到ラザル間ハ分賦ノ制度ヲ廢ス

ルヲナク且其人ヲ用フルト一瞬ノ間ト雖モ空シク光
陰ヲ費サシメザルヲ專要トスヘレ

第二十九回 施濟院ノ事ヲ論ス

貧人ハ赤身一物ナキノ謂ニアラス懶惰ニシテ職業ヲ
勤ノサルノ謂ナリ凡ソ人タルモノ家徒四壁ニシテ更
ニ積蓄ナキモ能ク職業ニ從事スレハソノ生計ヲ營ム
ニ安穩ナルヲ恰モ坐食シテ一百金ノ歳入アル素封家
ニ匹敵スヘシ又一貧洗フカ如キモ隨身ノ技藝アル者
ハ之ヲ十頃ノ田地ヲ所有シテ一家ノ活計ヲ立ル者ニ
比シテ更ニ身心ノ裕如ナルヲ覺フヘシ又工匠ノ徒ニ

シテ其家業ヲ子女ニ遺傳スル者ハ猶ホ其ノ子女ノ口
數ニ應シテ逐漸増殖ス可キ家産ヲ遺付スルニ異ナル
ヲナシト雖モ十頃ノ田地ヲ子女ニ分與スルカ如キハ
決シテ其ノ増殖ヲ望ム可ラサルナリ
勸工ノ邦ニ在テハ隨身ノ工藝ヲ除ク外別ニ生計ノ道
ナキ人民十ノ八九ニ居ルカ故ニ政府ニ於テ老病孤獨
ヲ扶持スルノ方法ヲ設ケザルヲ得ズ若シ夫レ其國政
治ノ要ヲ悞ラサルキハ即チソノ工藝ヲ以テ之ヲ扶持
スルノ資本ト為シテ老病孤獨ノ人ニ其心身相應ノ職
業ヲ附與シ或ハ之ニ工作ヲ教授シ又其教授ヲ以テ一

科ノ職業ニ列スハシ

然リト雖モ寒ニ衣ナク飢ニ食ナク街頭ニ窮ヲ訴フモ
ノニ衣食ヲ賑施スルハ決シテ政府ノ義務ヲ盡スト謂
フ可ラス何トナレバ其施物ノ出所ヲ問ハハ一トシテ
國民ノ供給ニアラザルハ無ク而シテ此乞丐ハ國民ニ
對シ分寸ノ義務ヲモ酬ヒ得可キモノニ非ザレバナリ
或人波斯王オーレンゼビーニ問テ曰ク何ノ故ニ施濟
院ヲ設立セザルヤト王荅ヘテ曰ク孤ハ大ニ我國ノ殷
富ヲ致スヘシ何ソ施濟院ヲ須ギント予ハ王ニ代リテ
將サニ言ントス孤ハ先ツ我が國ヲ殷富ニシ而シテ後

ヲ施濟院ノ建立ニ着手ス可シト
一國ノ富トハ工業盛大ナル謂ナリ果シテ然ラハ許多
ノ品目中或ハ二三ノ顛蹟アリテ貧困ニ陷ルモノナキ
ヲ保ス可ラザレハ工匠ノ徒モ亦一時ノ苦難ニ罹ルヲ
免レザルモノナリ
故ニ人民ノ困窮此極ニ到ルハ或ハ餓死ヲ救濟セン
カ為メ或ハ其盜賊ニ變スルヲ防シガ為メニ時トレ
テ工匠ノ徒ニ賑施シテ燃眉ノ急ヲ救ハザルヲ得ズ此
際ニ方テハ施濟院ヲ開キ或ハ之ニ齊シキ規則ヲ設ク
ルヲ洵ニ眼下缺ク可ラザル所ナリ

若シ國民一體ニ窮乏ニ陷リ其一私人ノ困窮ハ即チ一
體ノ困窮ノ結果ニ出ルハ之ヲ全國ノ困窮ト稱シテ
可ナリ國勢斯ニ至ルハ宇内ニ普ク施濟院ヲ設クト
雖氏民ノ困窮ヲ救済スルヲ能ハサルノミナラス懶惰
ノ性情漸ク増長シテ全體ノ困窮ヲ致シ彼此交々苦難ヲ
重カスルモノナリ

英國顯理王第八世ハ國教改革ノヲニ決定シ着手ノ初
メ教會ハ固ト遊民ナル而已ナラズ他人ヲ誘フテ素餐
ノ人クラシムルヲ以テ一朝ニ之ヲ滅除シタリ蓋シ教
會ハ好テ賑恤ニ從事シ勞作ヲ厭フ所ノ人民ヲシテ寺

院ニ輻輳シテ光陰ヲ徒費セシメ懶民ノ淵藪ヲ設クル
ガ為メナリ又王ハ下等ノ人民カ猶ホ縉紳貴族ノ寺院
ニ頼テ生活ヲ求メタルガ如ク徒手シテ糊口ヲ得ベキ
施濟院ヲモ廢絶シタリ此ノ一大改革ヲ經過セシ後工
商ノ職業ニ勤勵スルノ精神自ラ確定シテ今日ノ富强
ヲ致セリ

羅馬ノ如キハ勞作ニ堪ユル人、職業ヲ勤ムル人、土地ヲ
所有スル人及ヒ商業ニ従事スル人ヲ除ク外ハ何人ニ
拘ラス施濟院ニ其餘生ヲ養フノ自由ヲ許シタリ
之ヲ要スルニ富國ニ在テハ殷富ノ然ラシムル處不慮

ノ災患屢起ルガ故ニ施濟院ノ建立ヲ以テ缺ク可ラス
ト為スト已ニ論及スル所ナリ然レ氏全ク一時ノ燃眉
ヲ救フハ却テ永遠ノ施濟院ヲ設クルニ比スレバ其宜
キヲ得ルヲ萬々ナリ是レ災害ハ一時ノ經過ナルヲ以
テ之ヲ救助スルモ亦タ唯タ一時ニ止マリテ之ヲ不測
ノ變ニ用フルニ如カダレバナリ

萬法精理卷之廿三畢

真水玉

卷之三

仁正齋

明治八年十一月廿八日版權免許

繙譯並出版人 何 禮之

東京富士見町四丁目十一番地

馬喰町二丁目

島村利助

芝太神宮前三島町

山中市兵衛

日本橋通三丁目

丸家善七

發兌

書林

南傳馬町二丁目

穴山篤太郎